

## 開会挨拶

古井戸秀夫（東京大学大学院教授）

本日はお忙しい中をお集まりいただきましてありがとうございます。文化資源学研究室の主任をつとめております古井戸と申します。文化資源学フォーラムも今年は第11回目になりますが、このフォーラムは当研究室の修士課程に入学した学生の必修の授業になっています。今年は8人の学生によって企画・運営されておりますが、そのうちの4人が、一般入試といまして現役の学部からの進学、後の4人が社会人の大学院生です。その年齢も経験も違う4人と4人が昨年の4月から約一年間、様々な議論を重ねながらこのフォーラムを作り上げて来ましたが、その間、本日おいでいただいたゲストの方々はもちろんのこと、多くの皆さまのお力添えをいただいで本日を迎えております。

「寺カルチャー」という言葉は、あまり耳慣れないものとは思いますが、「仏教」ですとか「お寺」ですとかいうことについて、これからしばらく皆さんと一緒に考えてまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いたします。



## 研究報告「寺カルチャーの諸相」

竹内唯（「#寺カルチャー」実行委員）

### 「寺カルチャー」とは？

こんばんは、本日はお越しいただいてありがとうございます。実行委員の竹内と申します。今から、「寺カルチャーの諸相」と題して、今回のテーマである「寺カルチャー」についての調査報告を行いたいと思います。

まず、寺カルチャーって何だ？ということですが、寺カルチャーということばはわたしたちの造語です。寺は全国に77000ほどあって、実はコンビニの数より多いといわれています。コンビニやスーパーのないようなところにも、寺はあります。ただ、人々の寺との関わりは戦後からずっと、葬式などのライフイベントの際に限られてきています。具体的にいうと、葬式などの法事を寺と関わりを持たずに行ったり、それと、檀家も減っています。色々な面で、寺の存在感がうすくなりつつあるといえます。

その一方で、仏像ブームや、観光スポットとして寺が人気になっていたり、座禅や写経体験が流行っていたりと、お寺に由来するコンテンツは、老若男女を問わずに人気が高まっています。今回、私たちはこれらの現象やコンテンツを「寺カルチャー」と呼んでみることにしました。このフォーラムではその多様性と可能性を探ってみたいと考えています。そしてこの時間では、私たちが1年調査してきた中で出会った様々な「寺カルチャー」をご紹介しますとともに、私たちがどういう視点から寺カルチャーを考えているのかということと述べて、報告とさせていただきます。

最初に結論めいたことを言ってみますと、寺カルチャーにはいくつかの大きな流れがあると考えています。まず、仏像ブームに代表される、主に寺の文化財から派生したコンテンツを楽しむ流れがあります。具体的に例をあげると、皆さんもよくご存じ、博物館における仏像の展示などの楽しみ方です。そしてもう一方の流れとしては、実際の寺の担い手である僧侶の方々、寺の存在感が薄くなっていることへの危機感を背景に、寺を開放してイベントを行ったり宗派を超えて情報を発信したりする動きがあります。そして、寺という場所を起点として様々なタイプのサークルやコミュニティが生まれていく中で、寺と関わりがなかった人々も含めた多様な参加者が渾然一体となって、新しい寺のあり方を提示しています。これらの流れのどちらか一方に注目した論考やイベントなどはよく見られますが、私たちはその両方の流れが合流するところにもまた、寺カルチャーに関して新しい発見ができる可能性があるのではないかと考えています。

さて、それではここまでで述べました「寺カルチャー」の流れに沿って、具体的にコンテンツをご紹介します。寺カルチャーファンの方にはおなじみの情報も多いかもしれませんが、しばしお付き合いください。

### 文化財としての寺カルチャー

寺の文化財などから派生したコンテンツを楽しむ流れとしては、博物館や美術館での展覧会があります。仏教に関する展覧会は毎年沢山開かれていて、

人も沢山入っていて、まさにブームのように話題になってきています。例えば、美術館・博物館の展覧会の1日あたりの入場者数を見てみましょう。西洋名画の展示によって入場者を多く集めてきた美術館・博物館が近年日本文化をテーマにした展覧会を開催し、より多くの来場者を集めています。

### 展覧会別入場者数推移

	2007	2008	2009	2010	2011
1位	第59回正倉院展 奈良国立博物館	第60回正倉院展 奈良国立博物館	国宝阿修羅展 東京国立博物館	第62回正倉院展 奈良国立博物館	第63回正倉院展 奈良国立博物館
2位	レオナルド・ダ・ヴィンチ 天才の肖像 東京国立博物館	国宝薬師寺展 東京国立博物館	第61回正倉院展 奈良国立博物館	没後400年 長谷川等伯 東京国立博物館	空海と密教美術 東京国立博物館
3位	大回展展モネー 印象派の巨匠、 その遺産 国立新美術館	対決一巨匠たち の日本美術 東京国立美術館	皇室の名宝 一日本美の華一 東京国立博物館	オルセー美術館 展2010 国立新美術館	没後120年 ゴッホ展 九州国立博物館

一日平均で見る 展覧会入場者数ランキング  
(生活の友社『美術の窓』より)



文化資源学フォーラム「#寺カルチャー」  
2012.2.17

このようなブームの火付け役とされているのが2009年の「国宝阿修羅展」です。この後、阿修羅展を企画された金子先生にご登壇いただくので詳しくは説明しませんが、阿修羅展の入場者数は世界一を記録し、作家など、様々なメディアで活躍しているみうらじゅん氏を会長にした「阿修羅ファンクラブ」なるものが結成され、展覧会を盛り上げるなどの現象もみられました。また、阿修羅フィギュアがすさまじい売れ行きをみせ、仏像から派生したグッズやコンテンツの流行の原型がつくられたように思います。

今画像が表示されている展覧会のポスターも、みなさん見覚えがあるのではないのでしょうか。これは、阿修羅展と同じ東博で昨年開催された、「空海と密教美術展」です。このときには、仏像の人気投票が行われました。阿修羅展でも、阿修羅の顔が非常にハンサムだということで、各種メディアに取り上げられましたが、仏像などの文化財を、あの像がハンサムだ、この像がかっこいい、人気ランキングしてみよう、などという見方は、最近の傾向です。特に国立博物館の展覧会で、そのような視点が提示されたということが興味深いです。

そして、なぜこのような視線の提示が行われるようになったかということを考えてみると、現代の人々の嗜好に合わせるように文化施設側の人間も作品の打ち出し方を考えた結果なのでしょう。それは、先程述べた「寺の危機感」と通ずるものがないとはいえません。

寺カルチャーは、カルチャーセンターの講座としても楽しまれています。

### カルチャーセンター

仏教思想を問直す	東京大学教授 下田正弘
鎌倉仏教入門 親鸞思想を読む	お茶の水女子大学教授 頼住光子
親鸞「歎異抄」入門	親鸞仏教センター所長 本田弘之
『成唯識論』を読む 修行の階位	駒澤大学准教授 吉村誠
若き日の親鸞	筑波大学名誉教授 今井雅晴
仏像の楽しみ方	仏教研究者 瓜生中
古寺巡礼 名刹を楽しむ 本庭園・仏像・日本建築の見方	作家・美術史家・建築家 宮本健次
仏像の魅力を知る旅 奈良時代編	京都造形芸術大学 金子典正
仏像鑑賞入門	神奈川県立歴史博物館長 西川杏太郎
奈良時代の彫塑	東京藝術大学准教授 松田誠一郎
『空海と密教美術』展の見どころ	東京国立博物館学芸企画部教育講座室長 丸山士郎
座禅	龍雲禅師家 佐々木玄宗
写経に親しむ	曹洞宗玉宗寺住職 織道雄
座禅と読経 都会の中のお寺空間	常門寺知客 山本朴宗



朝日カルチャーセンター新宿仏教関連講座タイトル及び講師一覧（一部）  
(2011.6.18時点)

文化資源学フォーラム「#寺カルチャー」  
2012.2.17

2011年の朝日カルチャーセンターの講座を調べ、仏教系の講座とその講師をまとめてみました。2011年は親鸞の750回忌の年でしたが、「親鸞の思想」など、2011年の仏教界の話題をきちんとカバーしていることが分かります。

内容を見てみると、「仏像の楽しみ方」「仏像の魅力を知る旅」などは、気軽に趣味的に仏教を楽しみたい人へ、そして、例えば「仏教思想を問直す」「座禅」などは、気軽というよりは伝統的な本来の仏教——伝統的な本来の

仏教というものを定義するのは難しいことなのですがあえてそう言わせていただきますが——そのような仏教を学んでみたいという人へというように、多様なニーズに合わせて様々な講座が組まれています。

講師は、大学の研究者、美術・博物館系、お坊さんと、非常にバラエティに富んでいます。「仏教」「仏像」というひとつのことばで色々な人が集まっているということは、寺カルチャーのもつ特徴のひとつだと考えます。

### 寺からの情報発信とコミュニティ

次に寺側がみずから宗派を越えて情報を発信したりするような動きをいくつか紹介したいと思います。これらは何か新しい試みを行おうというお坊さんたちの意欲によって実現されています。

こちらに出した写真は、今回のゲスト、松本圭介さんの所属するお寺「光明寺」でのイベント、「誰そ彼」というものです。メンバーが実際に行き参加してみたのですが、タブラを使ったインド音楽があったりオルタナロックが響いたりする中で若者が寺の雰囲気や音楽を楽しみに来ているという雰囲気は、何とも不思議な空間だったとか。

このようなイベントには、多くの若い人が参加しています。つい先頃まで丸ビルで期間限定オープンしていた「寺カフェ」や、お坊さんが経営するバーに行ってみると、やはり20～30代くらいの人が目立ちました。

人が集まるという関連でさらに続けます。左上の画像は、インターネット上に仏教関係者が集まるウェブサイト、「彼岸寺」からとったものです。これもゲストの松本さんが創設したものです。その中で、現在活躍しているお坊さんを紹介する『坊主めくり』というページがありますが、ゲストの杉本恭子さんはこれを執筆していらっしゃいます。彼岸寺は寺の建物、つまりハードがないお寺ということですが、これは仏教に関する新しいかたちのコミュニティのひとつでしょう。特に、お坊さんである松本さんと、「一般の人」という的の外れかもしれませんが、仏教界とは元々は関係がない杉本さんのような方が一緒になって活動を行っているというところは、注目すべきだと思います。

右下は、これもゲストの田中ひろみさんが会長をつとめていらっしゃる「丸の内はんにや会」のページです。丸の内はんにや会は、「丸の内OLの仏教レジャーサークル」と称しています。丸の内はんにや会では、寺にとどまらず、神社好き、日本史好きなど、様々な嗜好をもった女性たちが集まっているようです。つまり、日本文化を総合的に気軽に楽しむ、という姿勢です。ここでは、寺側の人間でない人々も気軽に仏教を楽しんでいます。

以上のように、仏教をめぐるコミュニティを見てみると、寺側もそうでない人々も渾然一体となって仏教を楽しんでいることがわかりました。このような状況の中でいま、仏教とは全く関係のなかった、または関係がないと思って生きてきた人々が仏教に興味をもち始めることで、非常に多様なかたちをとって仏教が人々と関わり始めています。

### 「寺カルチャー」の多様な形態

たとえば漫画。この中（註・絹田村子『読経しちゃうぞ!』、岡野玲子『ファンシィダンス』、中村光『聖☆おにいさん』）で一番新しいものは、現在も連載中の『聖☆おにいさん』です。ストーリーは、仏陀とイエス＝キリストが立川のアパートで共同生活をするというギャグ漫画です。

この漫画を見て人々が面白いと思う理由として大きなものは、仏陀とイエスという、宗教的にはあがめるべき存在が立川のアパートで共同生活を……というギャップにあると考えられます。仏陀は仏教の開祖で、崇高だったり、なんだか難解なことを言っているような存在と思われていますが、そういうイメージが強ければ強いほど、そのギャップ、面白さは大きくなります。

そう考えると、「ゆるキャラ」というものもそのような要素がみられるものです。「ゆるい」という時点でもう寺カルチャーの二オイがします。ここにお出した画像（註・『宗派キャラミニシンポ』、ガジェット通信 <http://getnews.jp/archives/147160> より）は、京都大学に仏教系のゆるキャラが集めたイベントのものです。動行集だったり、仏具の「りん」をモチーフにしたキャラもいます。各キャラクターの性格付けも結構細かくついていて、仏教の教えをモチーフにしているものが多いです。

以上のように、仏陀を立川に住ませたり、ゆるキャラにしたりすることで何が起きているかという、要は、難解だとか、なんだかよくわからない

だとか、とつぎにくいだとか思われている「仏教」が、気軽な「とつぎやすい」ものとして、こちらにおいてくるわけです。寺でのライブや「イケメン」な仏像などには、ギャップから出た軽みがあります。これはまさに「寺カルチャー」です。「寺カルチャー」は、「仏教文化」ということばではもはや表現できないものです。

雑誌記事でどのように仏教が扱われているのかということも調べ、いくつか面白いものをあげてみます。例えば2008年『週刊ダイヤモンド』で紹介された、「東京ポーズコレクション」。これは、色々な宗派の若手僧侶たちがそれぞれ袈裟を着てファッションショーをするというものなのですが、会場はなんと築地本願寺です。宗派を超えてお坊さんが集まったというのは近年の傾向であるようですし、何よりお坊さんのファッションショーというのが非常に新鮮でインパクトがあります。

あとは、経済界で仏教が注目されるのは以前からあったことだとしても、例えば『Pen』などのデザイン雑誌、それから『an・an』『グラツィア』などの女性誌に仏教が盛んに取り上げられているということが分かりました。

## 雑誌記事にみるブーム

2007-2008		
2007.1.15	プレジデント	働きづめ生活に句読点「写経、座禅」事始め 誰でも簡単「プチ修行」で心の掃除をしよう
2007.3	中央公論	松原哲明 「宗教的生活」のすすめ『般若心経』はなぜ読まれ続けているのか 現代人のための禅入門
2008.1	大人の東京ウォーカー	立松和平 ほか 仏教、感動を旅する 仏教を旅する
2008.1.12	週刊ダイヤモンド	主要宗派をそろう踏みさせた若手僧侶の仏教への思い ファッションショー東京ポーズコレクション
2009-2011		
2009.6.19	財界	メディアトレンドを読む 分冊百科、仏像ガイド、生き方指南本が続々 いま、なぜ「仏教」がウケているのか
2009.7.1	Pen	日本文化の源流を訪ねて 神社とは何か お寺とは何か?
2010.6	an・an	村上定運 あらためて魅力を再発見!?“話して書いて”感じる言葉 般若心経 心が落ち着く言葉
2010.11.16	DIME	みうらじゅん ほっこりPOPなNEO仏教ブーム大検証
2011.1	グラツィア	Let's カジュアル仏教! 今、一番熱いお寺。“ツナガルオテラ”光明寺の挑戦!



女性が寺カルチャーを楽しんでいるという話題は先ほどから何回か出ていますが、寺カルチャーの流れを考える上でも面白いことです。歴史好きな「歴史女」や、山のぼりを趣味とする「山ガール」など、女性のライフスタイルとして近年色々な趣味が打ち出されて選択肢が広がっていますが、仏教もその選択肢の一部となっている感があります。例えば、「寺ガール」なるものも出現しました。

これは、先程話題にした寺カフェのウェブサイトにある「寺ガールとは？」というコーナー（註・Tera Café @Marunouchi 公式サイトより）での説明です。女性が色々なアイテムを持っているところが描いてありますが、数珠や御朱印帳はお寺めぐりに必要なものだから不自然でないとしても、最近流行しているカメラが「寺ガール」における必需品とされているところなどは、非常に現代の嗜好を意識していると考えられます。いわゆる「カメラ女子」ですね。少し気づきにくいかもかもしれませんが、このイラストの女性はイヤホンで何か聞いています。音楽なのか声明なのか仏教ロックなのかわかりませんが、やはり音楽などのカルチャーをいつも趣味として意識して身につけている女性、という属性を意識しているのだと思われます。

### 文化資源学からみた寺カルチャー

以上、色々寺カルチャーの多様性をご紹介してきたのですが、以上のことを文化資源学から見た現在の仏教——「寺カルチャー」——として、話をまとめてみたいと思います。

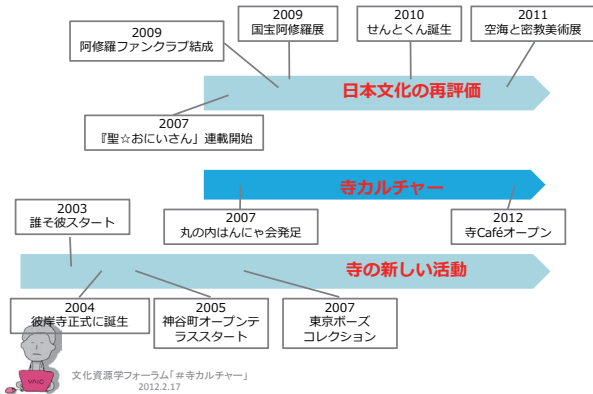
まず、これまでご紹介した寺カルチャーの事例を時間軸で整理してみました。2009年の阿修羅展によって盛り上がりを見せた、博物館などの文化施設やマスメディアでの仏教コンテンツの人気。これは広くとらえると、仏教だけにとどまらない「日本文化」全体が興味をもたれている現象であるということが出来ます。現在、江戸絵画ブームも盛り上がりを見せていますし、丸の内はんにや会の活動もそのようなものだといえます。

また、仏教がインターネットやカフェといった色々なメディアと結びつくことで、寺側からのより自由で多様な情報交換が実現しています。そして、これらのはざまに、これまで寺とは無関係だった人々とのつながりが生まれ

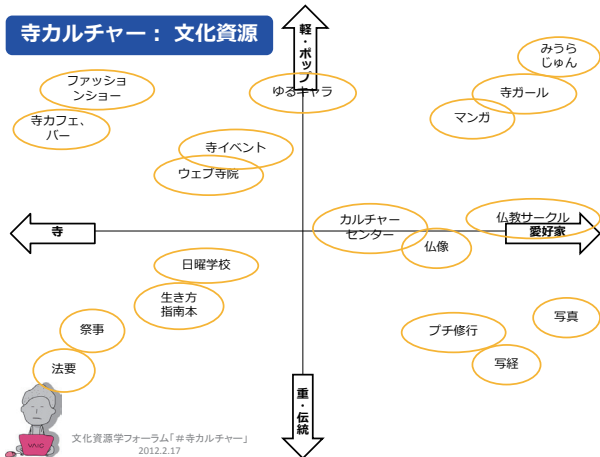
てきています。場所や宗派に縛られないで、「寺」の魅力や「仏教」の教えが面白く伝えられ、楽しまれているところが特徴的です。

これらの流れがどのように影響しあったのか、そして、その流れの主流なのか合流点なのか、また別の流れなのかは分かりませんが、「仏教」をキーワードに寺のコンテンツを楽しむ普通の人々が増えたということは確実にいえると思います。

### 寺カルチャー：時間軸



### 寺カルチャー：文化資源



次に、コンテンツ面から整理してみます。横軸にそれぞれの担い手、縦軸にそのコンテンツが気軽な趣味としての仏教（ギャップを楽しむ仏教）なのか、または仏教の伝統を意識したものなのか、という軸をとって、プロットしてみました。第1、3象限のコンテンツの存在はすぐに予想できるとしても、第2象限にはお坊さんのファッションショーや寺が関わるカフェやバーなどがありますし、第4象限にあたる場所にもプチ修行などがプロットできます。色々な要素をもったコンテンツが渾然一体となって存在し、様々な担い手によるアレンジがなされています。

そのアレンジと表象は、いわゆる伝統的な「宗教」としての見方からみると、非常にゆるやかで自由なものに映ります。そこでは仏教を受容する人々は、趣味のサークルに人々が集まるように、寺などを拠点としたコミュニティを結成したり、またインターネットやソーシャルメディアによって志向を同じくする人たちがつながったりしています。そこでは、多くが今までの地縁的なつながりではなく、仏教的な思想やモノを核としつつ、自発的でありつつゆるやかなつながりが生まれています。

寺カルチャーは、今までつながりのなかった様々な人やモノの中にあります。しかしもうひとつ注目すべきこととしては、どのような寺カルチャーにおいても、元々の仏教の「崇高さ」が通底音としてモトに流れている、ということがあります。縦軸より下の方のものはもちろんそのような意識がないと成り立ちませんが、上の方のものも、具体的にいうとマンガやゆるキャラのときにお話ししましたギャップのようなものも、そもそも仏教の崇高さや、難解さ、とっつきにくさなど、そのような仏教へのイメージがないと成り立たないものです。

みうらじゅん氏は、時期的にも内容的にも、そうした「はずし」の方式を

確立した人物といえるかもしれません。彼は当初は、仏教関係者などのいわゆる専門家からはキワモノ扱いされていましたが、何年かしたら反対にいわゆる「専門家」から色々意見が求められるようになったといいます。

寺カルチャーにおいては、仏教が含むこトバやモノは現代的なメディアに乗り、時にその中心にある宗教性を無視してみたり、思いがけないようなアレンジをされたりしながらも、それでも結局はいずれも「伝統」の重みのようなものをよりどころとしつつ、社会に流通しています。それと、色々な立場の人々が混ざり合って今の状況が構成されていることも重要です。今ある社会のなかでとらえられた仏教と寺をめぐる文化の形、それが寺カルチャーであり、仏教のいわゆる本来の姿と比較してそれを非難するのではなく、それを生み出した社会との関係や受容する人との関係において寺カルチャーを見るのが、文化資源学の立場として重要だと考えます。

今日は寺カルチャーの担い手であり、寺カルチャーの「現在」を知る方々を、実際にゲストにお迎えしています。ここからはゲストのみなさまからお話をお聞きして、「寺カルチャー」の多様性と可能性を探っていこうと思います。

### 基調講演「仏像ブームと今日」

金子啓明（慶応義塾大学文学部教授、興福寺国宝館長）

#### 自己紹介＆「阿修羅展」紹介

ご紹介にあずかりました金子でございます。私は長いこと博物館に勤め色々な展覧会をやってきました。最近特に仏像への関心が高くなってきたことについては、一定の役割を博物館が担ったという感じがしております。今日の話題は多岐に渡りますが、私としては、特に阿修羅展とか仏像ブームのあり方について、若干のコメントをいたします。



「国宝阿修羅展」のことは皆さんよくご存知と思いますが、（写真をみせながら）これは東京国立博物館で開場を待つ人の列です。これは大変な人数でした。会場に入らずに帰った方も多いため、実際に足を運んだ、あるいは関心を持った人は相当多数にのぼったようです。総入場者は94万6千人を超えまして、日本美術の展覧会としては史上最多、一日平均も約1万5千人を超えました。東博の「平成館」は大きな会場で、一日1万人までは何とかなりますが、それを超えると入場待ちの列ができます。「阿修羅展」に入るための行列を見て諦めて戻る人もいたようです。会期は61日間でしたが、この後九州国立博物館で行った時よりも1週間短く、もし九州と同じ会期でしたら百万人を超えただろうと思われます。アンケートでは、「阿修羅像自身の姿に感動した」「それを引き立てる博物館のディスプレイも良かった」というような評価をかなり多くいただきました。マイナス面は「混雑がすごかった」ということです。

その後、九州国立博物館で開催されましたが、会期は68日間で、九州開催の美術展では史上最多の71万人を集めました。ちなみにそれまでの記録は「ツタンカーメン展」の50万人ですが、それよりはるかに多くて大変な驚きでした。阿修羅は日本国内にあり、奈良興福寺に行けば見られるのに、滅多に見られないツタンカーメンより多い。「なぜ？」と話題を呼んだと思います。この入場者数については、2010年4月、イギリスの美術専門月刊紙の『アートニュースペーパー』にも「入場者数は断トツで世界一」ということで取り上げられ、「日本人はどうして展覧会が好きなのか？」という記事にまともりました。

#### 「阿修羅展」ブームの実際

このような仏教関係、仏像の展覧会がなぜ人気を博したかについては色々な要素があると思います。大変面白かったのは、展覧会開催以前、あるいは開催一か月程度の期間に寄せられた質問は、「阿修羅はどうして、いつ出来たのか？」「どのように作られたのか？」「歴史的な背景は？」といった、歴史的な背景や造り方が質問のほとんどでした。ところが、会期が一か月過ぎたから、そういう質問はほとんどなくなりました。かわりに「阿修羅ブームはなぜ起こったか」「人気の秘密は？」という質問ばかりになってきて、これは非常に象徴的現象だったと思っています。阿修羅展は朝日新聞との共催で、新聞社の広報活動がうまくいったことでもあります。先程紹介された「阿

修羅ファンクラブ」の設立や、雑誌の『ジュノン』との提携で「阿修羅ボーイ」を投票で選んで、選ばれた美少年が阿修羅展を紹介する、といったようなこれまでにないような広報活動の成果があったと思います。

しかしそれ以上に重要なのは、途中から質問内容が変わってしまったのに関連しますが、途中から口コミで草の根的に広がったことが特徴的で、ブログや Twitter で多数書き込まれて、いわば社会現象的な様相を呈しました。この時点になると、朝日新聞社は「自分は広報しない、その方が却っていい」ということになりました。これは非常に珍しいことです。その他にも色々な雑誌、テレビなどにも取り上げられ、その中でもタモリの「笑っていいとも！」で取り上げられて、みうらじゅんさんとタモリが、番組の中で阿修羅展について語り合っただけでも驚きましたが、それも仏教美術の阿修羅だったのは、本当にただごとではなかったという印象です。

このブームについては博物館の内外でもさまざまな反応がありました。中には「一過的なお祭り騒ぎ、泡のようなものだ」「人が多すぎて苦情が来た方が問題だ」「運営上の問題をもっと考えるべき」などという意見が館内外からありました。しかし、そうした眉を顰めるような意見があったものの、私としては、このブームを批判的、高踏的に見るのではなく、現代における考察の対象とすべきと考えています。これまで広く世界的にも取り上げられた現象を「単なる泡のようなもの」と言い切ってしまうのは、あまりに現象に対して無理解と思わざるを得ません。

もう一つ面白いのはアンケートにみる入場者の年齢層です。全年代のバランスが、十代と二十代、七十代までよくとれています。特に、十代・二十代で20%。三十代の17%を合わせると、37%。こういう若い方々に人気があったのは先程の報告とも符合します。特に若い女性に人気、というのも大きな特徴でした。

その理由としては色々あるでしょうが、まず阿修羅像自体が美少年で、有名な仏像である、ということはあるでしょう。しかしそれだけではない。阿修羅展以前に「仏像ブーム」が形成されていたのが原因だと思います。

形成される要因は色々ありますが、みうらじゅんさん、いとうせいこうさん、女優のはなさんなどの人たちが自らを「仏像ファン」と宣言して、『見仏記』のような本を出されたり、あちこちのお寺にお参りしたりする等の、「眉を顰める」方々からすると予想のつかない行動があって、それが仏像に対する親しみをつくる大きな要因になっていたと思います。それまでの仏像ファンは中高年。和辻哲郎の『古寺巡礼』、亀井勝一郎の『大和古寺風物誌』、白洲正子の『十一面観音巡礼』などの、教養的・文化的なものを趣味とする方々が多くて、それは中高年に圧倒的に多数でした。しかし今回の阿修羅展はそのような現象としてとらえることはできないもので、各年齢層に、特に若い層に受け入れられたということが、新しい仏像への関心のあり方を象徴的に表したのだと思います。

#### 博物館の果たした役割

それに加えて、博物館が果たした役割も大きかったのではないかと思います。例えば2006年に「仏像 一木にこめられた祈り」という企画が東博でしたが、これは当初は「人が入らないから開催するべきではない」という意見や、「20万人はとてつもないので成功しない」という意見が多かったのですが、予想に反して、来場者は当時からすれば破格の34万人を超えました。これは読売新聞社と共催でしたが、読売新聞社としても「思いのほか」の成功で、担当者は社長賞をもらえたそうです。そのような仏像周辺のファンの増加はこの頃から急に盛り上がりしてきた感じで、その後すぐ開かれた2008年の「国宝薬師寺展」が一気に80万人を超えまして、これはもはやブームといわざるを得ません。通常、入場者が50万人を超えたら大ブームですので、例えば「国宝展」のような催しでも入場者は50万人くらいですから、一つの寺の展示でこれだけの人が来る、しかもそれが仏像中心であるというのは大変なことでした。それが「阿修羅展」での頂点につながったものと思います。

それらを考えると、博物館は仏像ブームを加速させる役割を担ったのではないのでしょうか。博物館、特に東京の国立博物館は、もとは帝国博物館、皇室博物館ですから、一般の方々には敷居が高いものでした。その博物館が、仏像ブームのおかげや主催者側の努力もあって、一般の方々のための博物館

に変貌できたのではないかと思います。その後も「空海と密教美術展」で55万人の入場がありまして、ブームとはいえ、かなり本格的な本物のブームといえると思います。このブームをどう活かすか、いかに評価していくかが、博物館にとっての今後の大きな課題だと思います。

通常の展覧会では、博物館としては「研究者が研究して発表する」というのが正統な位置付けですが、「阿修羅展」はそういう伝統的なコンセプトではなく、「阿修羅」という非常に有名な仏像のすばらしさを、教科書的・啓蒙的な上からの立場の説明ではなく、一人一人の心の中での阿修羅像を体験していただきたい、そういう考え方をとりました。そうしますと阿修羅像と来てくださる人々との心の対話を重視せざるを得ないということになり、結果としてこの考え方は功を奏したと思います。仏像がどうできたか、制作者は誰かというのも大事なことです。一人一人が印象をもつ、それを大事にする、そういう対話のあり方は、ちょっと違った意味かもしれないけれど、大きなリアリティをもっているのではないかと思います。そのように、仏像を言葉によって説明する展覧会ではなく、ご自身の感性で感じていただく、これが企画のコンセプトでした。そしてそのことをいかに徹底するかが重要なポイントでした。

これは会場の風景ですが、皆さんじっと阿修羅を見つめ、沈黙し対話をしながら何かを感じています。その心と阿修羅との対話が成立して、目には見えない渦のようなものが回っているような感じがして、その場が印象の渦のトポスになったような感じがします。全ての展示がそうとは限りませんが、このような「感じる」というところに力点を置いた展覧会のありようというのが意義あることとして位置付けられたかなと思います。

#### 展覧会の戦略と展示の工夫

このような考え方に基づいて、どのような戦略があり得るかについても我々は考えました。阿修羅は美しい魅力的な像であるが、しかし仏像でもある。この仏像の美しさを皆さんと共有したい、博物館を「美の仏殿」にして、そこに今まで関心のなかった方も含めて多くの方に来ていただいて、市民のための「美の仏殿」に変えたいと思いました。ということで仏像のもっている価値はあくまでも大切にしたいと考えました。この考え方は展覧会の名称のつけ方にも及んでいます。ご覧のように阿修羅以外にも沢山の像が来ていますが、「国宝興福寺展」とはあえて言わず「国宝阿修羅展」としました。他にも仏像が来ているという意味では正しい名称とはいえませんが、展覧会の名称を象徴として考えると、「象徴以外にも他にも沢山来ている」ということにもなってお得になるという効果もありました。この展覧会は春に開いたので、「春の東京、三つのお顔に会いに行く」というキャッチを使いました。これは「国宝興福寺展」だと意味がわかりませんが、「阿修羅展」だから意味があるので、そのキャッチコピーは様々なシーンで活かされました。

またこのコンセプトは展示にも活かすよう工夫しました。仏像には「彫刻空間」というものがあります。それは目に見える量的なものではなくて、質的に周囲を占めるような空間です。その彫刻空間を妨げないように夾雑物などを避け、象徴性も考慮して、阿修羅のための「特別室」を設けました。その特別室はまさに質的な空間を作るものです。その彫刻がもっている彫刻空間とお客さんの空間を合わせたような広い空間をつくり、さらに広い高いステージを作って、その高いステージから降りて、360度阿修羅の廻りを回っただけでも一度見る、というようなディスプレイをつくりまして、空間の中の時間にも配慮しました。その結果、「阿修羅展」に行ったけど阿修羅が見られなかった」という苦情は一件もありませんでした。会場づくりとしては成功したのではないかと思います。

このための空間の設計は重要で、特に阿修羅の乗る台は80cmの高さに作りましたが、この高さについては何回も検証しました。崇高に見えて親しみももてるのはどれくらいの高さが適切かということを考えました。したがってあくまでも鑑賞本位、来られた方々に阿修羅と対話してもらいたいというアイデアから展示会場を構成し、これが「阿修羅がすばらしい」「ディスプレイが良かった」との評価につながったと思います。

#### 阿修羅像が獲得した現代的な意味

阿修羅像は約1300年前に作られた仏像ですが、この展覧会をきっかけとして現代的な、新たな意義を得たといつてよいと思います。それは1300年

前に造像を依頼した光明皇后もまったく予想しない、現代的・今日的な物語を新たに作ったといえるでしょう。阿修羅の印象の強さの要因を挙げれば、第一に、それがすばらしい仏像だからというのは間違いありません。ご覧のように三つの顔と六本の手の異形の仏像ですが、その異形も不自然な感じがしない。自然な感じがする。確かに美少年ではあるけれど、単なる美少年ではなくて、深い心の内奥、深い真理を持っている、と見る者が感じる。もう一つ興味深いのは、神の像ではあるけれどその表情が極めて人間的なことで、それは非常に際立った特徴です。我々の人間側での心のありようと近い関係をもっているという点で親しみやすさをもっています。

この阿修羅はよく見ると不思議な像で、眉を鬨めて憂えているようです。下瞼はふくらんで涙眼で、瞳を見ると遠くを見て意志をもっているようでもある。憂い、涙、意志などを複雑な形でもっている。しかも決して人に対して何かを強制しない。自分が何者であるかは発言しない。むしろ表情は内に向けており、曖昧模糊としながら常に揺れ動いていて、却ってそれが我々にとってはリアリティが感じられる。阿修羅は何も主張しないので、見る側が感情移入して、自分で何かを発見せざるを得ない。そうすると非常に自分に近いものを感じる。複雑、繊細で揺れ動く心というのが、現代の我々には自分自身の問題としてとらえることができるので、また来てみたいという衝動につながります。また、この展覧会のもう一つの特徴として、リピーターが非常に多かったということがありますが、それは阿修羅と阿修羅を見に来た人の心と心が結ばれたということではないか、仏教的に言えば縁ができたということではないかと思えます。こういう仏像として稀な世界を阿修羅がもっているのは重要なことだと思えます。

また、仏像は普通美術品と違って祈りの対象です。仏像に対する人は自然に手を合わせます。しかし陶磁器、工芸品、絵巻物等に手を合わせる人はまずいません。それに比べると仏像は他にない力をもっていますが、それには理由があると思えます。お寺の堂に入って開眼供養されると、仏像に魂が入ります。魂が入るとことは聖なる生き物になる、ということです。聖なる生き物ということは、それが単に生きているというだけのものではなくて、それがある作用を人々に与えると考えられるわけです。一旦お堂に入ると仏像には強い実存性が出てまいりまして、神秘的で霊的な力によって人々を救済したり、あるいは願いを聞き入れる存在になります。そこには仏像があることが前提ですが、例えば秘仏のように見ることができない仏像でも、そこに霊的な力が存在する。霊的な作用性、神秘的な力が宿っていることを意味します。このように、目には見えないけれど神秘的・霊的な実体性があるということは、他の美術作品には考えられないことです。

もう一つ、仏像は長い歴史を歩んで現代まで生き抜いてきた伝世の文化の象徴としての意味をもっています。歴史のある文化財には存在としての重みがあるのです。長い歴史を生きてきた仏像には、各時代に新しい祈り、新しい物語を生んでいくわけです。そうやって人から人へ伝えられていくたびごとに、造像の当初とは違う形で信仰されることが当然ありうるわけで、阿修羅像も1300年前には考えられなかった新しい祈り、新たな物語をこの21世紀に獲得していると考えられると思えます。

### 仏像の力と宗教施設としての寺

2010年3月、私は興福寺の国宝館の館内内装を変え、リニューアルオープンさせました。その時考えたのは、「仏像のもっている力とは何か？」ということです。これは本尊の千手観音像ですが、この鎌倉時代の5メートルを超える像は、もとの「食堂」の本尊として安置されていました。明治の廃仏毀釈の際、食堂が倒れた時に、この像だけが奇跡的に助かりました。現在は興福寺国宝館に納められていますが、その場所がかつての天平以来の食堂の須弥壇の遺構と同じ位置になりますから、本尊としての役割を今も担っています。この千手観音は手が沢山あって、人々を救います。手も体も光背も金箔を貼られていて、金の光を放つのです。その光に触れるということが、救われることを意味します。したがって、手にも顔にも光背にも照明を当てる工夫をしました。「向こうから光が来る」という照明設計です。同時に高さを強調するために下からライトを当てて、影をつくって高さで人を救済するというような設計にもしました。

そして2010年、遷都1300年で奈良は賑わいましたが、国宝館には年間120万人という驚くべき数の人々が来ました。その来場者を観察していると、

千手観音像の前に賽銭箱を置くと80%くらいの人が、像の前に来るとごく自然に手を合わせ、賽銭を入れています。そして異例のことですが、1週間で賽銭箱が持ちきれなくなるくらいになりました。それくらい手を合わせる人が多かった。つまり祈りということが自然と行われたわけです。お寺という宗教施設にとっては極めて意義のある光景でした。

### 仏像ブームの背景と現代 — 寺カルチャーはどのように発展していくか？

この仏像ブームの時代的背景を考えてみますと、パネルディスカッションでも話題になるかと思いますが、現代人、特に都会的な生活をしている人にとって、とても大きな問題になるのではないかと考えています。都会では非常に孤独な人々が多いということと関連性があるのではないのでしょうか。自分で自分の周りに目に見えない壁をつくる。その壁がないと社会に順応できない。そのために社会向けの仮面、ペルソナをかぶりながら生きていく。しかし本当の自分は別にいると考えざるを得ない。そのような社会はどういう社会かといえば、合理化、効率性、成果主義が問われる社会、競争原理が強い社会です。したがって、自分の心、傷つきやすい心は自分の中に留めることで生きざるを得ない。他者に相談することができない人が多いのではないかと思います。「心の病」といわれるものとも連動することですが、そうした自分の中に抱える「悩み」を誰かに聞いてもらいたい、聞いてくれる人や場所が欲しいということではないかと思えます。仏教的なカルチャー、寺カルチャーということであると、人の気持ちを「聴く」ための機能というか、役割が寺にはあるのではないのでしょうか。

もう一つ、論理性とか競争原理とは全く違うリアリティを人々は求めているのではないかということがあります。パワースポットの人気のように、何か判らないが力があるものに触れたいという人々の気持ちに、仏教的なカルチャーは応える素地があると思えます。

また、今日の情報化社会では情報はますます速く多く獲得できますが、その情報はPCなどを通じて得る、実物と違う「虚像」です。そこでは目と手と脳は使うが、体を動かすことはありません。それに対して、仏像を見に行くためには、寺などに自分の体を使って行かなければならない。むしろ体を使う場所を人々は求めているのではないか。PCなどにかかわる情報の問題は一方では身体性の問題と関連してきます。これは実際の病気とも関連します。心の病が体の病になるという現実性がありますので、それに寺や仏像がどう応えていくのかということは今日的な意味があると思えます。

仏像ブームは、社会的な単なる一過性のブームとしてとらえるのではなくて、現代人の心に深くかかわる問題として考える必要があるのではないのでしょうか。あるいは、仏像ブームの問題を多様に考えるということは、非常に真摯な現代の問いになるのではないのかと思えます。仏教という核があり、仏像ブームがあって、そこにさまざまな方々が関心を強く持っている。このことは経済原理や現代における競争原理の社会のあり方、経済至上主義的な社会のあり方とは異なる現代的なリアリティを持っているのではないかと私は考えています。寺カルチャーがどのように発展していくのか、ということには非常に重要な意味があるのではないかと思えます。

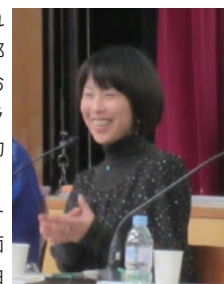
### パネルディスカッション

#### 「寺カルチャーの多様性と可能性を探る」

金子啓明（慶応義塾大学文学部教授、興福寺国宝館館長） 杉本恭子（フリーライター）  
田中ひろみ（イラストレーター、文筆家） 松本圭介（浄土真宗本願寺派光明寺僧侶）  
渡辺裕（東京大学大学院教授／コメンテーター）  
土本一貴（「#寺カルチャー」実行委員／コーディネーター）

#### <パネラー自己紹介>

杉本 みなさんこんばんは。初めまして杉本恭子です。よろしく申し上げます。自己紹介に「お坊さんライターと呼ばれて」というタイトルを付けてみました。私は京都でライターをしています。ふとしたきっかけでお坊さんにインタビューを始めました。フリーでライターを始めたのは2007年12月でしたが、約1年やってみたところ、依頼を受けて取材に行くのとは別に、自分でテーマを定めてインタビューをしたいと思い立ちました。1年間やって何が面白かったかと振り返ってみたら、お坊さんが面白



かったなと思いました。また、お寺についても、観光していた時と違って、お坊さんと話しながら内側から見ると、お寺にはいろんなあり方があることにも気づきました。そこで、観光や歴史以外の切り口で仏教やお寺のあり方を伝えてみたいという気持ちで「彼岸寺」に企画を持ち込みました。どうせなら仏教に興味を持っている人に読んでもらいたいと思ったからです。

『坊主めくり』の連載をはじめたのは2009年3月。ちょうど世の中は阿修羅ブームで、お寺に行く人はみんな仏像を見ていたと思いますが、私はなぜか人間のお坊さんの方を見ていたんですね。現在までに28人のお坊さんインタビューを掲載しています。そういうことをしていると、だんだんお寺や神社が得意だと認識されるようになり、「お坊さんライター」と呼ばれたり、神社の取材を依頼されたりすることが多くなってきています。

「なぜお坊さんにインタビューを？」とよく聞かれますが、取材で出会ったときにお坊さんが面白かったというのが一番大きな理由です。私はお坊さんに会う機会が少ない環境で育ったので、お坊さんのイメージといえば『一休さん』くらいしかなくて、「何か間違えると一喝されるのかな」などと漠然と思っていました。でも、実際は携帯電話を持ってテレビも見ているし、奥さんもいて私たちと変わらない暮らしをされています。とはいえ、会話のなかでふと仏教的なことを言われたりして、そのギャップも面白いです。もうひとつは、大学生のときに非日常空間でのコミュニケーションやお祭りの研究をしていたので、お寺という非日常空間でどういう関係が結ばれていくのかということに興味を持っていたこともありました。

『坊主めくり』では、取材で出会った「お寺を開く」というキーワードでお寺をつくっていくとどうご住職さんたちのお寺を伝えてみたいと思いました。最初は社会とどう接点をつくろうかと考えるご住職に会いに行っていました。文化財などがなくても、どうやってお寺に来てもらい接していけばいいのかを考えているようなお坊さんにインタビューしました。お寺というハードウェアは、お坊さんがどうするかで変わっていくと思います。最初はお寺に興味がありましたが、お坊さんの話を聞くうちにだんだん仏教にも興味を持つようになりました。お坊さんが話す仏教が自分にしみ込んでくるのを感じ続けています。今では、お寺とは建物ではなくお坊さんのいる場所ではないかとも考えています。

私の心に響いたお坊さんの言葉をいくつか紹介します。「縁というのは、つながるときと離れるときがあって、離れたら離れたでいいわけです。また次の縁ができてくるから。一回結ばれたら永遠とは考えないです」。縁を結ぶことばかりが良いことではないということに驚きましたし、ずっと大切にさせていただいている言葉です。「あの人がどうだこうだと言わないで、自分のやるべきことだけを見て、自分ができなかったことだけを反省して生きていられるらこれほど精神的に楽な生き方はないんですけども、それができないからみんな苦しんでいるんです。お釈迦さまのおっしゃったことはこれに尽きると思います」。こういう言葉がインタビューの中で急に出てくるのでびっくりします。イラストレーターをされているお坊さんがおっしゃったのは、「仏教の面白いところは人間目線じゃないところ」。こういう語り口で仏教を語るができるのだなと新鮮に思いました。

少し時間が押ししましたが、あとすぐお気に入りなのは「お経はお風呂で教えてもらいました」とか、子どもの頃にピンポンダッシュでなくて「梵鐘ダッシュ」をして怒られましたとか、そういう話です。先程お話に出た仏教マンガのギャップの話ではないですが、楽しませていただきながらお坊さんとお付き合いをしています。ありがとうございます。

田中 丸の内はんんや会代表の田中ひろみです。よろしくお願ひします。私は丸の内はんんや会というのをやっていますが、別に丸の内活動しているわけではなく、丸の内のOLが最初につくった「仏教レジャーサークル」です。やっていることはゆるい感じで、坐禅や滝行もしますが、お坊さんと合コンしたりもしています。私はもともとナースで、別にお寺の生まれでもなく仏教と全く関係ありませんが、出身が大阪でおじが仏像が好きで、子どもの頃から仏像と一緒に見に行かされていました。当時は仏像に興味はありませんでしたが、大人になって三十三間堂の1001体の千手観音を見て、恋に落ちたように仏像が大好きになって、それから仏像を見に行くようになりました。いま仏像関係の本が5冊、あとは四国八十八箇所にも行ったので『ふらりおへんろ旅』という本も書いています。イラストレーターで、文章も書いています。近著では『田中ひろみの神社に行こう』という神社の本も書か

せていただいています。あとは全然関係ない『B型男と幸せになる方法』とか色んな本も書いています。今まで32冊の本を書かせていただいています。奈良市の観光大使もやらせていただいている、平城遷都1300年のときはお寺に行って仏像の講演をしたり、新丸ビルで開かれていた「高野山カフェ」でも仏像の講演をおこないました。カルチャーセンターでも仏像の見方や史跡めぐりの講座ももっていて、訳がわからないですがいろんな活動をしています。丸の内はんんや会はインターネットで検索したらすぐ出てくると思っていますので、無料で誰でも入ることができますので、みなさんも参加していただければと思います。それではよろしくお願ひします。



松本 みなさんこんばんは。浄土真宗の光明寺というお寺から参りました松本と申します。10年くらい前にはこの教室の一番後ろの席あたりで授業を受けていたということもありがとうございます。当時はこちら側に立つことは考えたこともないような控えめな学生でしたが、このような機会をいただけてありがとうございます。

自己紹介を簡単にしますと、東大文学部を卒業して、面白そうということでお坊さんになりました。就職活動では広告代理店に行きたいという気持ちもありましたが、それよりも自分の良いと思ったものの価値を伝えることに惹かれていました。仏教が好きでしたが、それを伝えるときに、代理店では伝えるものを自分で選べません。お寺に入れば仏教のことだけをやれるということでお寺を選びました。

入ったお寺は光明寺といって、神谷町という東京タワーが見える都心にあるお寺です。卒業後ここに住み込みを始めました。本堂前の空間がすごく気持ちよくて、友達遊びに来たときに「ここ、気持ちいいね」という話になって、もっと多くの人に来てもらおうということで始めたのが「お寺カフェ」です。別にカフェがやりたかったわけではなく、とにかくまずはお寺に足を運んでほしかったからです。普段、お寺は開かれているのに人が来ません。でも町を見渡すとカフェには沢山の人が集まっています。だったらカフェに行くような気持ちで来てほしいというメッセージを発したらいいいのではないかと考えて始めたわけ。カフェにしたのは気楽に来てもらうために過ぎず、そこから先の体験はお寺らしいものを用意しようと考えたわけ。当初はメニューもありましたが、値段が書かれているわけではなく、あくまでも無料サービスです。基本的には「店長」のお坊さんがお参りに来た方にお茶やお菓子でおもてなしをしています。他にも寺ヨガを毎週水曜日にやっています。月1回は本堂でヨガを行い、そのときは法話もします。

あとは「誰ぞ彼」という音楽イベントもやっています。2、3組のアーティストの演奏とその間に法話があって、最後にみんなでお経を読みます。これまでに24回やっています。この「演奏+法話+読経」というスタイルは、お寺ライブの標準形として他のお寺にも波及しています。たとえば築地本願寺の「他力本願でいこう」というライブもそうです。「他力本願」は浄土真宗で重要なことばですが、阿弥陀様の本願にお任せしていくという意味で、他人の力に頼るという意味ではないことを知ってもらうためにこの名前になりました。ちょっと聞くとゆるい感じがしますが、このように説明すると、上の偉いお坊さんに話を通ります。

あとは「彼岸寺」というウェブサイトをやっていて、FacebookやTwitterも活用しています。お坊さんはソーシャルメディアの恩恵を最も受けている職業のひとつではないかと思ひます。これまで「住職」は「住」んでいる所を離れられませんが、ソーシャルメディアによって身の回りの人としてできなかったことが、他地域・他宗派のお坊さんとなつなっていくことができるようになったのが大きいです。

あとは「のど仏は第二頸椎」というポッドキャストの番組をやっていますが、これもiPhoneがあればその場で録音ができます。また、「雲堂undo」というiPhone/Androidのアプリケーションを作り坐禅に親しんでいたいただけますし、他の地域で坐禅している人ともつなげられる機能もあります。

本を書いたりもしていますが、このように色々やっているのを整理したくなり、MBAを取りにインドに行きました。なぜMBAを取ったかというところまで人に集まってもらい仏教に触れてもらう機会を単発的につけてきたけれど、そもそもお寺や僧侶はどういう方向を向いてこれからやっていけばいいのか、21世紀におけるお寺のあり方を根本的・体系的に考えてみたかったからです。ただそれを専門で教えてくれるような学校はないので、ビジネススクールを選んだわけです。

最近やっているのは「未来の住職塾」です。MBAに行ってきたことを活かしてお寺を人と社会のチェンジ・エージェントととらえ、具体的に考え行動する組織体へと変えていく、そういうことができるお坊さんのネットワークをつくらうということをやっています。ありがとうございます。

## <パネルディスカッション>

**土本** 文化資源学研究室の土本と申します。4名のゲストに加え、文化資源学研究室の渡辺裕教授にコメンテーターをお願いします。司会進行は土本が務めます。時間が限られていますが、「寺カルチャーのいまとこれから」ということで、近年のいわゆる仏教ブームの背景にあるもの、現在の潮流がもつ性格について考えていきたいと思います。さらにブームの行方とお寺そのものの今後のあり方についても議論ができればと思っています。

まずは、「寺カルチャー」が近年とみに注目されるようになりましたが、その背景には何があるのか、みなさんはどのようにお考えでしょうか。例えば田中さん、若い女性が仏教に惹かれるのはどうしてでしょうか。

**田中** パブルの時は外へ外へと目が向いていたと思います。海外に行ったりブランド物を買ったり。でも今の女性は疲れてきていて足元を見るようになった感じがします。日本帰帰というか、和の習い事も流行っていますし、身近にあるお寺や神社に目がいくようになって、仏像やお寺に触れてみたら心地よくて、それでみなさん行かれるようになったのかと思います。

**土本** 田中さんが『神社に行こう』という本を出されたように、お寺だけでなく神社も含めた日本文化に対する関心が集まってきたようにみえます。松本さんは仏教関係者として今のブームをどのようにとらえていますか。

**松本** 私がお坊さんになったのは2003年ですが、就職の話で「お坊さんになる」と言うと周りの人にびっくりされました。そのときに思ったのは、面白い仕事かということでした。面白いものはどこにあるかと考えたときに、自分の中で仏教には面白いものがあると思いました。それは宗教としてだけでなく文化的・歴史的にも魅力があると思ったのですが、それらがまだほとんど発掘されていない感じがありました。だから、みんながブームというより良さに気付いてきたのではないのでしょうか。ちょっと掘ってみたらどんどん魅力が出てくるという流れがあるのかと思います。

**土本** 自分自身を振り返ると、物心ついてから初めて仏教に触れたのは、小学生の頃の葬儀でした。当時の私は葬儀で流れるお経を、不謹慎な言い方ですが、音楽みたいな感覚で「興味深く」聴いていました。そういう感覚は今の「寺カルチャー」を支える若い人たちの感覚に似ているのではないかと、つまり仏教を抹香臭いと思うのではなく、自分にとって未知のものと思う感覚です。そのあたりはみなさんどう思いますか。

**杉本** インタビューで、あるお坊さんに何で最近そうなっているのかという話をしていたら、最近の農業ブームが話題になりました。農業は辛く苦しいものというイメージが一回白紙に戻って良さの方に目が向いているのと同じように、仏教に対しても古い先入観がなくなったが故に新鮮な興味を感じている人が増えているのではないかと聞かれてすごく納得しました。これは土本さんがおっしゃったことに近いと思います。私がお坊さんにインタビューをしていると、だいたい40～50代の人には「なんでそんなことを」というようにちょっと嫌な顔をされます。でも若い人は「面白そう」という受けとめ方で、世代間にギャップがあるのを感じます。

**田中** 阿修羅展の前と後で変わってきていると思います。以前は「仏像が好き」とか「写経に行く」というと「何か宗教に入っているの?」と言われてきましたが、阿修羅展以降は「私も好き」とか「私も写経に行ってみよう」という方が増えました。世間の見目が変わってきたというのは感じます。それと、若い人たちは昔の人と比べると、子どもの頃からそんなにお寺に行っていないと思うので、外国人的な目で仏教を新しいものとしてとらえることができ、また新鮮に感じるというのがあるのではないかと思います。

**土本** 先程の基調講演で、「阿修羅展」来場者の年齢層が均等で、特に10～30代の割合が大きいという話があったかと思います。金子先生は若者と仏像・仏教の関係についてどのように考えますか。

**金子** これまでの話を受けていえば、確かに「阿修羅展」は画期をつくったといっていると思います。阿修羅を自分の身近なものとして感じるができる、だけれど、阿修羅はすごく魅力的で、ずっと見ていると自分の中にも響くものがある。その共鳴するものを自分の中で繰り返し聞くと、また見に行きたいということになります。それぞれの人が自分なりの印象をもつということで阿修羅の印象は多様性を帯びてきます。その多様性がむしろ重要で、あの像はあの見方でなければいけないとなると、その広がりや止まってしまう。だからそういう意味でいえば、融通性のある広がりや多様性に開いていったということがひとつの大きな意味かと感じます。そういうことで仏像に関心をもつということは、内部に入れば入るほど仏教の核心に触れるわけですが、そういうものを内に含んでいるので、その意味での信頼性もあると思います。軽いノリで入っていくのも重要ですが、さらに深く入っていけば返ってくるものがあるという、一種の相互作用があるのだと思います。あるものから影響を受けてまたそこから様々な新しい影響関係が出てくるとすれば、つまり有機的な連動性を仏像が果たすことになれば、今の時代に求められている重要な要素であるような気がします。

**土本** 「阿修羅展」はその後九州国立博物館に巡回し、興福寺に戻って来たときに「お堂でみる阿修羅」展を開催しました。お堂で見るのと博物館・美術館で見るのとは、どのような違いがあるのでしょうか。博物館・美術館がお寺とは違う価値付けを行うとしたら、それは何でしょうか。

**金子** これはとても大きな問題だと思います。やはり場の重要性があります。お寺にずっとある仏像はその場にふさわしい存在だといえます。その場所が歴史的なものであれば場所そのものが時間を背負っているため、その場に行ってみるものの重みは、場の問題としてまずあります。

それから、先程多様性という言い方をしましたが、色々な見方があっていいわけで、博物館はお寺ではありませんから、博物館なりの見せ方があって当然いいと思います。阿修羅の廻りを360度回って見る設定をしたと言いましたが、通常お寺では、仏像の光背を外して後ろを見るときは何かと壘壁を買います。でも、作者が見えないところに意識をしないで作ったかというところではありません。ちゃんと作っています。そういうものを違った立場から見てみるためには、色んなセッティングが必要です。360度回って見ることは、新しい面を発見するという要素があり、それは博物館の中でしかできません。そういう意味での場としての価値があります。お寺ならお寺で見る価値、博物館なら博物館で見る価値があり、その中でも色々な見せ方が可能だと思います。動態的なものとして場所も時間もモノも考えていくことが重要だと思います。

**松本** 「阿修羅展」のキャッチコピーに「会いに行く」とありました。「見る」ではなく。これは博物館側がお寺的なセッティングをしているのかなという印象を受けます。

お寺は仏様が普段いらっしゃる「家」です。家で会う顔と、奈良から東京まで出てこられて会う顔とはやはり違うだろうし、そこでの向き合い方も変わってくると思います。単なる美術品、モノとして見るのではなく「会う」ということでとらえ直していくと、仏像の持っている価値が最大限に生きてくると思うので、面白い流れだと思って見えています。

**田中** お寺では蠟燭の光の独特な感じが素敵ですが、博物館だと先程お話があったように色々な角度から見るができます。ここから見るとセクシーだとかかっこいいとか、そういう、楽しみ方といったら怒られそうですが、そういうことを感じます。

**土本** 仏像の見方が多様になってきて色々な楽しみ方が認められてきているという流れがあるかと思いますが、お坊さんたちはこれをどう見ているのでしょうか。杉本さん、これまで多くのお坊さんと話をしてきたなかで、お坊さんがどう考えていると思いますか。

**杉本** お坊さんと仏像について語らうことはほとんどないので、お坊さんと仏像の付き合い方という視点で。特に浄土宗、浄土真宗のお坊さんと本尊である阿彌陀如来の関係は深く、みなさん阿彌陀さんのことをすごく語ってくれます。みなさんご自坊の本尊の阿彌陀如来と向き合っておられて「阿彌陀さんは心の刺を抜いてくれる」「一大決心する時は必ず阿彌陀さんの前に座

る」と話してくれます。私はその関係を羨ましく思うこともあります。それは仏像とではなくて仏そのものと対話されているのだと受け取っています。

私が尊敬している京都・法然院のご住職が、阿彌陀如来の前で深く額突いて礼拝されるお姿を見せていただいたときは、阿彌陀仏を礼拝する喜びのようなものを神々しいほどに感じました。私はそれを見て初めて、「阿彌陀如来はいる！」と思いました。それはずっとご住職の姿を見てきて、お説教を聞いてきて、さらにその礼拝の姿を見たというところで初めて感じたのだと思います。私は仏像のモノ的などころより、むしろその先にある仏と人がどのようにつながっていくのかに興味を感じます。

土本 仏像の先にあるものという話が出ました。寺カルチャー的なポップな楽しみ方を入力として、そこから先に深入りして仏教信仰につながっていくのかどうかということに興味があります。

丸の内はんにゃ会は仏教をポップに楽しむことを掲げていますが、活動を通して仏教信仰につながる流れはあるのでしょうか。

田中 「仏教レジャーサークル」と謳っているだけあって、あまり宗教にこだわりがない方が多いです。いろんな宗派のお坊さんをお呼びして勉強することもあるので、宗教について興味のある方はいると思います。そこから深く入る方もいるかもしれませんが、650人ほどの会員のみなさんがどうなのかは把握できていません。

土本 お坊さんがお寺を開いていくことの目的には、最終的に仏教を広めることがあると思いますが、どうでしょう。

松本 お坊さん一般としてではなく私の考え方としてお話しします。お坊さんになりたての頃は、自分が好きな仏教を伝えるため、仏教に触れて知ってもらうための場やご縁をつくることを考えていましたが、今の私はお寺の運営に興味があります。それを突き詰めていくと、伝えるべき価値や提供すべき価値は、仏教そのものというよりも、仏教に支えられている心の安心や内面的な成長だと思います。仏教はこういうものだと言えども、「抜苦与楽」という仏教の精神をもって。

苦しみは時代によって変わる。昔であれば死が差し迫った恐怖としてあったのが、長寿社会になった今は死よりもボケのほうに怖い、という話をお年寄りから聞くことがあります。今の苦しみの在り処に目を向けて、そこに安心という価値を提供することによって人の心を支えていく、その全体の営みを支えるものとして仏教があると私は考えています。だから仏教のアイデアを単純に渡すことにはこだわっていません。

土本 行くとき必ずそこにあるという仏像の性格は、心の安心を求める人にとって重要な意味をもっているかと思いますが、お寺もその場にずっとあるということが心の安心につながるかと思いますが。

松本 お寺カフェより先に音楽ライブを始めましたが、それは多くの方に来てもらうきっかけを持つことが目的でした。ただライブは一日で終わってしまうイベントなので、いつでも来てもらえる仕組みがほしいということで、オープンテラスを始めました。それがあればいつでも気楽に来られるというメッセージにもなります。

展覧会も期間限定なので、出てこられた仏像もそれが終わればまた「家」に帰っていかれるという、そこにはもしかしたらまた会えるという安心感があると思います。

金子 そこに場所があるということが重要だと思います。例えば巡礼では祈りを献げてお礼をもらいますが、これはそこに仏像があることが前提です。そこに拝めば祈りが通じるという可能性を期待するから拝むわけです。

そうした心の問題にどう対応するかという問題は、ひとつは仏像が仏堂に安置されていてそれをお参りするということもあるでしょうし、そこに行けばこのお坊さんがいて話を聞いてもらえる、という安心感もあります。何かを得られる信頼性があるかないかがとても大きなことだと思います。

この間の東日本大震災後、1か月ほど経ってから宮城県南三陸町で瓦礫の中から石のお地藏さんが見つかりました。そのときに被災者の方は自分の仲間だと言って一生懸命に頭を撫でて手を合わせているのです。手を合わせて拝める、信頼できるものがよく残ってくれたという安心感と祈りの気持ちがあったのだと思いますが、美しい光景に見えました。

美しさがあるということは、そこに真実があるということです。表面的な真実ではなくより深いもので、それこそヨーロッパの人には、敬虔な信徒に見えたのではないのでしょうか。

日本の中に目に見えない形で伝統として仮に残っているとして、それが宗派や宗教を問わず宗教性として感じられるようなものであるとすると、それは重要視すべきだと思います。心の問題を大切にしながらお寺の問題も一緒に考えていくのも重要な方向性だと感じました。真・善・美がそこに作動しているかどうかはきわめて大きな問題だろうと思います。

渡辺 私は、文化資源学ということで、文化というものの社会的なあり方という観点から様々な現象を考えてみようという立場で研究を進めています。実をいうと私は寺や宗教にはほとんど関心をもったことがないのですが、ただ「寺カルチャー」というテーマは、単に寺や宗教の問題というよりは、文化というもののあり方をどうとらえるかという、ものの見方につながり、そしてそれをはっきりと示している現象であると思います。最近のポップなノリのような現象を考えたときに、それとともに、今まで論じられてきた「奥深い宗教」との関係が問われている。関係のあり方自体が今どうなっているのかということを考えてみると色々面白い問題が見えてくる気がします。

私は音楽が専門ですが、例えばクラシック音楽で起こっていることには似た部分があります。いわゆるハードコアなファンはだんだん少なくなって、ある意味先細りをしている状況があります。ところが他方で、『のだめカンタービレ』というドラマ（原作はマンガ）が制作され映画にもなりました。ああいうものが増えることによってクラシック音楽への関心が呼び起されました。これは、お寺を題材にしたコミックなどと非常に近いところがあります。もちろん、クラシックの本質が分かっていないと言う人もいますが、他方で、ああいうものをきっかけにしてクラシックに親しんでもらうことを期待する声もあります。しかし私はどうも、どちらの見方でも無い現象があるのではないかという気がしています。

例えば、『のだめ』でクラシック音楽に関心をもつ人の関心のもち方は今までにない新しいものだと思うのです。これまでのハードコアな部分が、外に向かって薄められて広がったのではなく、既存のものの中に別のものを発見しているという面があると思います。それはたしかに、今までクラシックの「本質」として考えられてこなかったものかもしれないのですが、だからといって非本質的なものというわけでもなく、むしろ、今まで切り捨ててきたり見えなかったりしたところに光を当てることによって、これまで「本質」とされてきたものには還元されない多様な側面があることがはからずも明らかになった、というような気がします。

先程の金子さんの話の中に、阿修羅展での仏像の見方はお寺では見られない見方だという話題がありました。それはまさに、お寺にあるときは違う面がみえるようになっていくということなのだと思いますが、それは宗教的ではなく芸術的な見方だとか、お寺で見ると本来の見方だという議論になってしまうのではなく、まさにそのことによって寺とか宗教とかいうものの「本質」がとらえ返されているのだとみることが重要だと思います。他方、それとは全く違った、みうらじゅん的な新たな見方が出てくると、「それは宗教でも芸術でもない」などという話になってしまいがちなのですが、そこでもまた、「宗教」や「芸術」自体がとらえ返されているとみるべきなのだと思います。宗教も芸術も一枚岩ではなくかなり多様な要素をもっており、それぞれの世界の「中心」にいる人は、実はその多様な要素の存在を無意識のうち解っているところもあるのだと思いますが、外から見るとステレオタイプ的なイメージをもって、それとのギャップを逆に面白がることによって、そういう要素が「中心」を離れたところでクローズアップされる、というようなことになるのだと思います。

『のだめ』でも、あの中での音楽大学の描かれ方が面白い、という関心のもち方をした人は多いと思います。実はあの描写は非常に一面的なのですが、それはそれで一つの側面であることは間違いない。そういう面が見えてくることにより「クラシック音楽」との別の関わり方が可能になって、そのことが「クラシック音楽」のあり方自体を変えてゆくというようなこともあります。コアにあったものが全体に広がるという単純な関係ではなくて、境界領域のようなところで特別な関心がぼっと生まれて、そして今度はそれとの関係のなかでコアの方のあり方自体も変化してくるというような現象が起こっている気がします。

私は、文化とは基本的にそういうものだと考えています。このような議論をすると、どうしてもやはり二分法的に「新しい時代だから自由にやればよい／本来のあり方を守らなければいけない」という話になる。ですが、今日



色々話を伺ったり、最初のプレゼンテーションに出てきた事例を見ていると、ひとつのことに収束していくというわけではなさそうですが、同時にただ多様化したり拡散したりしているということでもありません。仏教や寺はそもそも歴史の中で一枚岩的なものではなく、変わってきているわけです。それからやはり共同体のあり方との関係で、例えば、都会の寺と地方の寺でも当然あり方が変わってきます。そういう様々な広がりがあるなかで、ある側面がある時代になるとぱっと見えてきて、それを受ける形で、「寺」というイメージ自体がまた別のあり方をするようになってくるという、キャッチボール的なことが状況としてあるのではないかと思います。

寺カルチャーというテーマについて、なぜあえて「寺」であって「宗教」ではないのかという疑問もあったかと思いますが、「寺」を離れた展開になっているようにみえるところでも、実は「寺」が問題になるということが重要なのだと思います。これは「寺」が本来の仏教のあり方であるという話ではありません。むしろ「寺」は極端に言えばバーチャルでもよくて、色んなものを包み込む、最終的に意識が収斂していく場として寺というものがあり、そういう存在を設定することによって「宗教」は成り立っているという意味です。「寺カルチャー」を問題にするときには寺は、こういう見方があるといい、ああいう見方も……と、無限に拡散して訳が解らなくなるような状況を留め、色んなものを吸収し、時代のなかで変わりながら、ひとつにまとめる装置であると思われます。今回は、ひとつの拠点としてあり続けるものとしての寺のあり方が浮かび上がってきたように思います。

今の私の門外漢的な「暴論」をどう受け取られたか、みなさんにお聞きしてみたいのですが。

松本 お坊さんとして。本当におっしゃる通りで、先程「安心を提供する」と言いましたが、お寺といったときには場としての力や意味が大事だと思います。

お寺に行ったから仏教に出会えるというよりも、オルタナティブな価値観に出会える・触れられるということが大事です。最近は官でも民でも効率性・合理性が叫ばれますが、お寺は社会の中の遊びの空間というか、別の価値観に触れられる空間です。別の価値観が必ずしも仏教でなくてもいいと私は思っています。そういう場であること自体が、もしかしたら多様性を許容しながら発展してきた仏教のあり方にも通じるところもあるかもしれません。だから場の意味ということでは私はその通りだと思いました。

杉本 私が最初にお寺に興味を持ったのは、お寺の持つ非日常空間（アジール）としての可能性です。人間は社会の中だけで生きて息苦しくなります。日常を出てあらゆる肩書きを外してしまう関係を結ぶ必要があると思っていたので、お寺に行くなかで例えば「仏の前で平たくなれる」場で、自由な関係性が結べるということはあると思っています。

少し話がずれるかもしれませんが、「誰そ彼」のように定期的にイベントを続けているお寺には、イベントを支えるグループやコミュニティがあります。たとえばお寺で個展を開かせてもらった画家が感謝の気持ちからお寺の行事を手伝うようになったり、お寺の劇団で育った人たちがスタッフになって新しいイベントのスタッフになったり。「誰そ彼」を支えるスタッフも、光明寺が好きになり、そこでライブをすることが好きになった人たちで、檀家でも信者でもないかたちでの関係をお寺と結んでいるのではないかと思います。どう思われますか。

松本 「誰そ彼」の、檀家でもお坊さんでもない中心メンバーが言っていたのは、「自分は仏教を信仰しているとはまではいわないけれど、この感覚は多分好きな球団を持ったのに近い」ということです。光明寺を応援することも好きだし、そこで何か手伝ったりするのも好きだし、光明寺がみんなに「良いよね」と言われることも嬉しいという、そういう感覚みたいです。

杉本 私が彼岸寺に感じていることと近いです。仏教が好きになってその考えを大事にしている助けられてもいるけれど、今までの仏教界のなかの言葉では説明しきれない、どの位置にもない関係ではないかと思っています。そういう人たちの層もあるのではないかと思います。

田中 私がお寺に行くのは、宗教的な何かを求めてというより癒されたいというような気持ちからです。

少し前になりますが、ドイツの大学教授が今の「日本女子」の仏教文化についてどう思われますかというインタビューに来たことがあります。「日本女子」の仏教ブームが外国にまで伝わっているのが意外でしたが、向こうに

してみれば不思議な現象だったようです。「日本女子」の仏教ブームは宗教を求めているのではなくて、癒しや和だったりして、宗教的なものよりは楽しみたいという軽い気持ちで、お寺に行く方が多い気がします。あまり深く考えることはなく、お寺に行くと雰囲気や癒されたり、仏像にお会いして心が癒されたりという感じで、昔のようにお寺に行くからといって信心しているわけではない方が増えているのだと思います。

金子 現象的には色々なことがあると思います。癒しを感じるのも心の問題が重要だからだと思います。仏教や仏像というのは、それはそのものとしてありながら新しい形をつくります。芸術でもそうです。仏教の信者ではないけれど仏教に共鳴するところがあって、自分なりに新しい形で芸術をつくっていくという例は沢山あります。

だから見た目だけで仏教的である／ないと判断できないし、判断する必要もない部分もあります。色んなものと結びつきながら新しい文化や形がつけられていくのがひとつの文化的な現象だと思いますが、それを引き出す力が仏教やお寺には心の問題として厳然としてあるとすれば、先を見ながら色んな活動が可能ではないかと思います。

例えば木や石に神が宿る、仏が宿るということがいわれます。仮にそうした考え方に何かを感じながら石の抽象彫刻を作れば、そこにはそういう精神が働きます。そうなれば、その作品を見ただけではわからないかもしれませんが、そこにおのずと無意識かもしれないけど求心力が働くことがあります。前向きにいろんなものを創造的に作っていくのも現代においては重要ではないかという気がします。

渡辺 今回は色々な面白い事例、局面が見えたと思います。少し残念だったのは、せっかく女性の方おふたりに来ていただいたのに、いま何故とりわけ女性が仏教に関心をもつのかということについて十分に突っ込んだ話ができなかったことです。

先程「歴史」や「農業」が少し話に出てきましたが、他にも女性の趣味の広がりや流れで、たとえば「鉄子さん」のような——もちろん仏教とは全く関係ありませんが——そういうものに対する興味の持ち方・関わり方に時代の表れ、あるいは世の中での女性の立場が変わっていることを反映している側面があると思います。

仏教の中での話も重ね合わせながら、とりわけ女性の文化としての今のあり方の特徴をみていくと、色々な面白いことがみえるのではないかと思います。むしろそういう形の中で、仏教と呼ばれるものの表象のされ方や機能の仕方を見ると面白いと思います。もちろん、大きな意味で心の問題に常に関わりながらということは変わっていないと思います。

例えば女性が寺へ行くということや、1960～70年代のいわゆる「ディスカバー・ジャパン」で、女性が京都のお寺に行くことがブームになりました。あれも癒しの側面があって、当時の女性週刊誌を見ると傷心の女性が京都に行くというような話が色々出てくるわけです。現代の状況は、そういう側面とももちろんつながっていますが、しかしそこからまたひとひねりしたような関心のもち方、関わり方が出てきているような気がします。多様性を語るときに、単に多様になっていくということとともに、その中でどのような形で求心力が働いているのか。多分、昔みたいに仏教に大きな中心があって外に向かって放射状に力が働くのとは違って、局所的に作用するかたちで文化が動いているところがあると思います。文化資源学は、さまざまな価値観・見方がぶつかり合うなかでどのように文化が動いていくかを研究しようとするところなんです。そういう意味からいうと、この問題はおそらく現代の社会を考えていく上で色々なことを明らかにしてくれる問題であると感じさせてもらった次第です。

土本 ようやく議論が温まってきたところではありますが、時間が超過しましたので、ひとまずここで終わりたいと思います。

